

砺波カイニヨ倶楽部会報

第十八号

平成十三年五月発行 発行所 砺波カイニヨ倶楽部 代表幹事 柏樹直樹
事務局 富山県砺波市表町七一二十五 TEL 0763/33/6588
天野一男建築工房内

『二十世紀の散居と屋敷林』 講演会

【四十六名が参加し刺激をもらう】

三月十一日(日) 砺波市文化会館内の視聴覚室で当会主催の講演会を開催した。

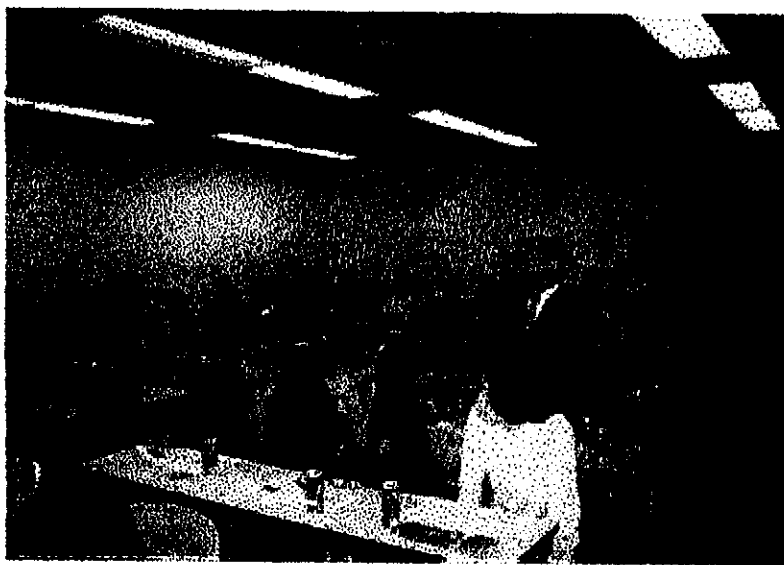
講師は長井真隆先生(元富山大学教授)で「二十世紀の散居と屋敷林」という演題で開いた。約二時間スライドもまじえて、理論と実態をにらんだ示唆にとんだお話しに、参加者は大きな感銘を受けた。

参加者は四十六名と当会の催す行事として最高の結果を得た。



冒頭 先生の御紹介とあわせた挨拶を柏樹直樹代表幹事が行った。

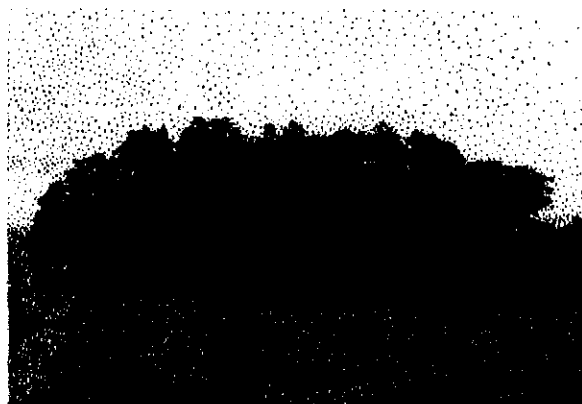
「中国からの旅行者が、屋敷林にまつまられた砺波散居の風景に大変心をうたれ、将来への理想郷としてうけとめ帰国しているとのこと。ところが入居者は実利のないことを前提に益々屋敷林をないがしろにした暮らしを求めている。



(参加者との意見交換)

今のスギを主林にした屋敷林の姿は平野での一つの風土であり、どこにもない先祖の遺産であること。そのスギは二酸化炭素の固定力が非常に優れていること等、新しい視点でのつき合い方を身につけ次代に送ろう。今日はその感性を磨くチャンスにしあおう」と訴えた。

講演内容などは、裏面へ↓



□庄川町 古上野
柏樹 直樹
TEL 32-0131

□砺波市 小杉
出村 忍
TEL 32-9145

□砺波市 太田
尾田 武雄
TEL 32-2772

〈お知らせ〉 近く総会です、ぜひ御参加の用意を

カイニヨ・建物 写真撮影会のお知らせ

昨年、11月より行われていた撮影会参加者募集のお知らせです。

雪もとけ、青葉も薫り、田植えもはじまり、カイニヨと建物を写真におさめるには最高の季節となりました。

新しい時代への資料作成に参加しませんか？

ご協力お願いします!!!

□内容(具体的な仕事)

各戸の写真を四方位から撮影し、その家の特徴をメモする。

□詳しくは、その参加される区域の責任者にお問い合わせ下さい。



「循環と共生文化の屋敷林を」

— 長井真隆先生の講演メモ —

- 循環型の生計が21世紀の基本だ。
- ヨーロッパ → モンスーン。乾燥地にある。判断がはっきりしている。
- 日本 → 自然災害多発。決断しにくい。スミ絵のタイプ。森は生活基盤の中心(心のよりどころ)であったが、現代は庭園化の傾向にある。そのため鳥の運ぶ樹種が減っている。

- 富山県の自然は変わらない
- 自然 → 水と電力
- 人 → 勤勉
- 伝統技術 → 銅器、アルミ、ファスナー
- 屋敷林に変わって、アルミ、トタン工作の技術が対応。

- 気温1~2℃あがると・・・
- 昆虫、細菌に変化が出る
- (活動が盛んになり、植物に影響)

- 住宅：
- 旧建材住宅 (開放型) → 新建材の住宅 (密閉化) → 省エネ住宅 → 自然循環住宅

- 素材技術：
- 板、壁に屋敷林 (潜在技術) → トタン、アルミサツ (伝統技術) → 複合素材 (先端技術) → 屋敷林の再評価
- 文化として流れを認め、あらたな文化を求めよう。

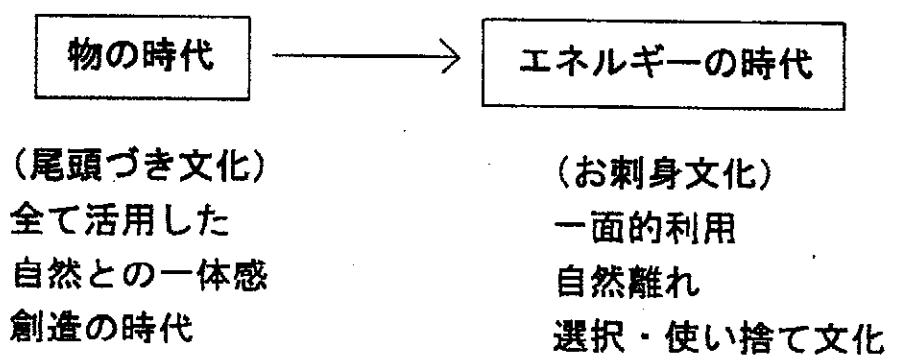


(長井真隆先生)

- スギの葉のエネルギーを考える
- スギ33本 (1年で) → スンバ 2t → 3合の御飯を焚く 390g(1食に) → 1日3回焚いて2年 10ヶ月分の燃料となる。
- 10kg ポンベ15本分になる。

- 屋敷林の位置づけとして循環社会への道としてとらえること。
- 景観、ながめのよさだけでは残っていない。

○屋敷林文化の今昔



(講演会スナップ)

循環と共生の文化
地域的实践・感性を大切に

- 散居村と屋敷林に接した学者の言葉
- 「田舎のような顔をした大都会だ」
- この深部の意味を考えあおう。



《参加者の声》

- 冷静に屋敷林のことを考えて見ることを痛感した。
- アルミ技術と屋敷林家屋との関係をきき大変驚いた。会社の同僚にも話してあげたい。
- 子供にもぜひ聞かせてやりたいと思った。
- スギを伐採したり、過度の枝落としをやっているが、考えさせられた。
- 大変な刺激を頂いた。
- 屋敷林内を歩き今日の話しを体で確認したい。見学会を増やしてほしい。